

## 論文審査の結果の要旨

氏名：細川 俊太郎

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：日本ファッション写真の成立—ファッション写真の構造と歴史研究を中心に—

審査委員：（主査） 教授 鈴木 孝 史

（副査） 教授 山本 雅 男                      教授 浅井 謙

本研究は「ファッション写真とは何であるか」という問題意識に端を発している。これは論者がイギリスに留学していたことが大きく影響している。イギリスはファッションデザイン教育に熱心で、セントマーティンズ（ロンドン芸術大学）やロイヤル・カレッジ・オブ・アートなどの高等教育機関で教育されており、それぞれ評価が高く、多くのファッションデザイナーを輩出している。ファッションといえば「シャネル」「ディオール」「セリーヌ」等有名ブランドがあるフランス・パリを思い浮かべるが、そこでは教育機関は少なく、イギリスのような他国でファッションデザインを学んだデザイナーが各ブランドで働いている。そこでイギリスで「写真」を研究していた論者が持ったファッション写真に対する問題意識がこの研究のテーマの原点になっている。さらに母国日本の「ファッション写真」についても興味を持ち、この研究に至った。

論文の構成は「序章」「第1章：ファッションとメディア」「第2章：ファッション写真の始まりと定義」「第3章：戦前の日本ファッション写真」「第4章：戦後の日本ファッション写真」「第5章：ファッション写真の本質と日本ファッション写真」「結論：ファッション写真再考、その意義」であり、別冊付録として各時代のファッション誌に掲載された日本ファッション写真一覧をつけている。

論文の「序章」で研究の方向が示されている。この分野「ファッション写真」について日本における成り立ちおよび発展に関する体系的な研究がなされていないことが分かり、そこで2つのテーマを設けて「ファッション写真の本質」を考察している。そのテーマは「日本におけるファッション写真史観の形成の分析」、さらに「ファッション写真の本質を日本と欧米という二つの面の考察」である。その結果、「日本のファッション写真」が世界に認知され、さらに欧米で「写真」は「芸術的表現」と認知されている状況と同様のことを日本にも起こす一助に「ファッション写真」がなるであろう、と考えた。これが研究の意義指定としている。

「第1章：ファッションとメディア」において、ファッション写真の本質についてファッションとメディアという面から言葉の定義をし、歴史および先行研究を検討・考察をしている。ここで、スタイルを様々な形に変化させることで身体を装飾し、他者を誘惑し、自己を表現するのがファッションであるとし、さらに、その自己幻想と社会が出会うことによって流行という共同幻想へと変化していく、と議論を展開している。そしてファッションメディアがこのような自己幻想や共同幻想を生み出す装置であるとしている。メディアの歴史は人形、肖像画、ファッションイラストレーションというように変化しながら、トレンドを提示、さらに広く伝えるために印刷媒体としての雑誌が誕生したとしている。この考察は肯定するものである。

「第2章：ファッション写真の始まりと定義」では「写真」が印刷メディアと大きく関係していると考え、それを考慮しながら「ファッション写真」の定義を試みている。そのためにまず当該テーマに関する先行研究の調査を経て、初期のファッション写真史を研究している。まずファッション写真は肖像写真や日常のスナップ写真に現れ、次にファッション雑誌が誕生し、そこに写真を提供する職業写真家が出現したとしている。その代表としてアドルフ・ド・メイヤーとエドワード・スタイケンを取り上げたことは適当な人選であったと考えられる。以上の研究を元に論者は「ファッション写真」を7つに分類し、ファッション写真とは「先鋭的な表現を用いて、ファッション産業が文化・社会の中に神話的共同幻想を創出する手段」とした。特性を7つに分類してそこから「ファッション写真」を解明したことは説得力がある。

「第3章：戦前の日本ファッション写真」で戦前（太平洋戦争前）の日本ファッション写真を論じている。その発生は欧米のようにイラストレーション（日本の場合は浮世絵がその役を果たしていると思われる）、肖像写真に端を発しているとし、ファッションに大きく関係する洋装が一般に普及したのは開国以来、時代の要請があり、それに応えるように1930年代に洋装雑誌や服飾専門誌が数多く発刊されたことが大きく関わっていると調査の結果から導き出している。その中で欧米の初期のファッション雑誌に発行意図が近いことから「ル・シャルマン」誌と「スタイル」誌の2誌を日本におけるファッション雑誌の始まりとした。さらに、その2誌のヴィジュアル面で貢献した写真家2人、福田勝治と堀野正雄についてその作風の特徴を述べている。そのイメージ傾向から彼らの写真は当時日本の写真界にドイツからもたらされた「新興写真」の影響が大きいという論考は的をえている。さらに現在も発行されている「婦人画報」誌にも言及し、編集者の桑沢洋子とともに活躍した田村茂についても研究し、その作画の特徴を解明している。

「第4章：戦後の日本ファッション写真」では太平洋戦争後から高度成長期までの、日本のファッション文化に大きく寄与した雑誌を研究している。高度成長期に到るまでの「装苑」誌や「ドレス・メイキング」誌の特徴を取り上げ、ファッションを取り巻く環境の変化を「ファッション写真」から調査した。当時の欧米の写真からヒントを得て業界で一世を風靡した写真家たち、ファッションショーの頻繁な開催やプロのファッションモデルの出現等、ファッションを取り巻く環境の欧米化について述べている。さらに、その撮影のために使われる撮影機器材の進歩および欧米の写真関連情報が大量流入したこと、雑誌の「グラビア」と写真ページに名を残す写真印刷技術の進歩、その元になる原稿作成のテクノロジーの発達・向上の貢献に対しても言及している。「写真」と言えば撮影機材と感光材料が大きく関わるが、感光材料（主にフィルム）と処理技術について、欧米の優れたものが多く輸入・導入されたことを丹念に調べ、その影響を指摘していることは大いに評価できる。さらにその後に出現したファッション雑誌の中で1970年代に一つの到達点を作ったとする「an an」誌の貢献とその衰退を論じている。

「第5章：ファッション写真の本質と日本ファッション写真」で、日本ファッション写真の歴史は、ファッション文化の中で、欧米に追いつき、追い越せるのかを模索した「模倣と独自性の獲得」の歴史と理解し、「an an」誌はその実現を目指した雑誌であったが、日本の大衆には受け入れられなかったとした。そのことから70年代以降の日本と欧米のファッション写真の潮流を追うことで日本と欧米のファッション写真の違いを考察している。そこから導出された見解は、デジタルメディアの発達によって個人の表現活動が盛んになり、欧米という共同幻想から逸脱し、日本独自の表現をファッション写真に生み出す時代になっているということである。

「結論：ファッション写真再考、その意義」では、日本のファッション写真の変遷・発達を如上のことから考察すると「欧米から入ってくる『ファッション』という概念が共同幻想として受容され、普及した」そのことから「大衆がそれを具現化したものとして『洋服』が入手できるようにした」ことが分かったとしている。ところが1990年代以降は「ファッションの大衆化」が世界的に広がり、ファッション写真が描く欧米的共同幻想主義は途絶え、「個人による宣言」の世界が台頭し、個々人が選択・表現するものとなった。そのことで日本のファッション写真は史上初めてファッションの世界で優位に立つ機会を得たといえるであろう、と一連の考察結果を述べている。

日本は平安時代から江戸時代まで概ね和服文化であったが明治時代に欧米の洋装文化を取り入れてからファッションという概念が入ってきた。それ以後この文化は欧米の後を追いつながら成長し、世界で活躍するデザイナーを輩出してきた。しかし、日本の現状は、世界に通用するブランドはユニクロ（ファーストリテイリング）しかないと言って良いであろう。人間生活にとって衣・食・住は欠かせないものであり、それぞれ国の基幹産業として成り立っている。それぞれ企業の中で生き抜いていくためには魅力ある製品の開発・製造・販売が不可欠である。衣料に関わるアパレル産業においても同様なことが言える。良い製品を製造しても発信をしなければ発展はない。その発信手段の一つとしてマスメディアがあり、衣料の場合は紙媒体、つまり雑誌による伝達効果が大きい。そこに大きく関わっているのが「写真」である。ところが日本には2,000を超える多数のファッションブランドがあるのにもかかわらず、世界で評価されるブランドは皆無に近い。その原因の一つが発信力の欠如と言ってもよいであろう。その発信手段の一つが「写真」であるが、この分野において世界で活躍する日本人のフォトグラファーがいないのである。可能性はあるのに、実現できずに停滞しているファッション関連産業の現状を打破するために細川俊太郎氏の研究

は大いに役立つと確信する。今までに日本ファッション写真に関して系統的に考察、表現され、かつ写真を取り巻くテクノロジーも加えて調査・研究したものは皆無であるといつてよい。様々な角度から広く世界を見ている点でこの研究にはオリジナリティーが十分あると認める。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平 成 3 0 年 2 月 2 日